

H. H. McCarty,
The Geographic Basis of American
Economic Life.

pp. 702. Lond. & N. Y. 1940.

石田龍次郎

地理的環境論の誤を指摘することは、極めて容易いことである。然し、具体的な事實、現實の事象に出あつてこれを説明せんとする場合には、極めて簡単に「環境の然らしむる所」といひ、「地理的影響によつて」と片付けてしまふ論者が多い。

一つの理論・概念として環境論の缺點を知つてゐても、複雑錯綜する現實は結局二つのもの、環境と人種に歸するものが、一應の「解釋」の如くに見えるのである。たしかに凡ての地表上の現象で全然「環境の影響」を受けず、また「人種(民族)の特質」と全く關聯しないものがあるだらうか。さればこそ、この二つの合言葉が最もよく使はれるのである。そして問題が大規模のものであつて、人間は生物として、土地は地表の一部分として取

扱はれるやうな場合には、たとへ究局の解釋でも説明でもなくとも、環境と人種で片付けてさして不都合でないやうに見えるのである。こゝで紹介をしてみやうといふ一書もまた、この二つのもの一方をその土臺としてゐるのである。それはアメリカ合衆國現在の經濟生活を地域的に區分して説明しやうといふのであつて、その區分の基底はやはり環境なのである。

地理學の中心課題は地表地域の比較研究にあり、經濟地理學の基本的な目標の一つは地域(領域)と關聯しない何々の理論を構成することよりは、寧ろ地上種々の地域に於ける經濟發達乃至經濟生活の差異を求めるところにあるといへる。いふまでもなく地理學的現象は面積的概念なくしては成立し得ず、且地域の特異性を明かにしやうとする爲には、地表を「略ぼ同一の特徵をもつた區域」——地理區に分けることは極めて必要な處置である。地理區の一つである經濟地理區、經濟地域を決定する方法はまづ測り得る經濟の形態を分類すること、次には種々の場所における經濟發達の型と關聯する要因を確めることである。即ち概念を經濟學に、方法を地理學にとつて分析は生産物

の生産と交換からはじめられるのであるが、經濟學に於いては生産或は經濟活動の量は所得として測られるから、勿論それをも使ふが、例へば合衆國の農業は國民所得からいつて十分の一に過ぎないけれども、國土の五五％は耕地であるから、土地利用は經濟活動として最も基礎的なものとして取らねばならぬ。

土地利用、所得、或は從業人口等を日本ならば市町村の如き最小單位について測つて、その分布から地域に於ける生産の量と型とを分類し、各々の型の面積的擴がりを決定する。かくして出來た經濟地域はその時における型、擴がりを示すもので、従つて永久不變のものではなく時代とともに變り得るのである。

地域の決定に、そしてまた環境の研究者に好都合なことにはアメリカ合衆國に於ては日本などと異り、代表的な經濟地域は各々、他と異り分化するのみならず、各々が全國土に對して極めて特種化してゐるのである。例へば玉蜀黍地帯、棉花地帯といへば、各々、玉蜀黍、棉花がその地域の農作物の殆んど大部分を占めると同時に、その玉蜀黍、棉花は合衆國全產額に對しても高度の比率を保つのである。その他合衆國全體についていふに農業は中北部諸州面積からいへば全國の四分の一の場所に五分の二の農産物があり、アイオワは豚の四分の一を産し、テキサスとペンシルバニヤは三分の一の礦物を、ワシントン、オム

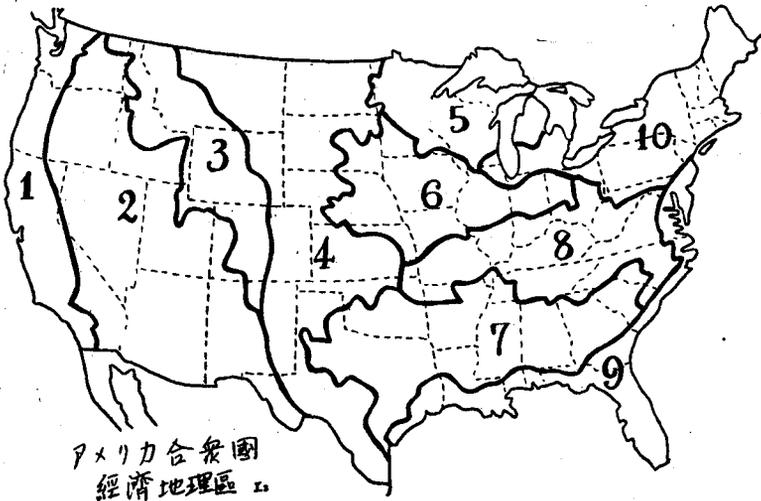
ゴンも同じく三分の一の木材を、また工場生産物の三分の二はニューヨークからシカゴまでを長徑とする隋圓内に得られるのである。(かゝる經濟地域の特種化は交通機關の自由なる高度の發達なくしては到底考へられぬから、今次大戰によつて甚大な影響を受けてゐること思はれる。)

以上の如き經濟的構造は自然と人文との双方に關係するから、合衆國の各地方を理解するためには、一、自然環境、二、それを生産に利用する能力、三、生産過程に用ひらる經濟組織等についての知識を要する。本書は合衆國各地の經濟活動を國家的規模に於て十區に簡略化して示したものであつて、各區の主要なる特徴をその發達に最も影響を與へたと思はるゝ自然・人文兩因子について敘述した。結局、地域的記載をなすことによつて、各地域の經濟發達の特徴、或は經濟活動の型をつかもうとするのである。そこでその十の經濟地域は大別して、年代的に古く且より工業化した東部では歴史的要因、機械的技術、財界産業界の獨占的形態等が最も重要視され、中部の農業地帯では商業はより自由競争的であり、諸要素は地形・氣候・土壤等の自然條件に關聯することより大であり、西部諸州では自然の制約は更に強く經濟活動は殆んど自然環境の質によつて調べ得る状態にある。従つて合衆國西部、太平洋岸諸州の各種環境・資

源の地圖分布圖はその地域の經濟發達及び經濟活動の最もよき指標となる。谷底平地、森林、鑛物、淺堆、入江等の所在はそのまゝ農業、林業、鑛山業、漁業、都市等の位置を示すこととなるのである。こゝでは中部、東部の如き歴史的、文化的關係はより少いので、本書の敘述は自然の強い西部から、自然の關係と同様に文化的要因の強くなる中部に、最後に文化的要因の最も錯綜してゐる東部の工業地帯へと進んでゐる。

最初に合衆國の地理環境を説明する一章がある。自然環境としては氣候（降水、四季、夏雨、颱風、極前線、季節の差等）、地形（氣候、農業、運輸等との關聯）、土壤（肥、沃度、腐植土の價値）、鑛物、位置などをとりあげてある。はじめに述べた如く、これらの自然環境が本書の經濟地域を構成するのに重要な役割をなすのである。即ち（1）太平洋沿岸區の東端はカスケード山脈、シエラネバダ山脈によつて境せられる。これらの山脈が氣候、運輸等の障害となつて、これを越えれば、次の（2）大盆地・高原區となり、東方にロッキーマウンテンまで延びて、乾燥せる山間高原をなし、次の（3）ロッキーマウンテンはそれ自身一つの經濟地域を構成してゐる。大盆地・高原區は寡雨と、ロッキーマウンテンは山地地形と經濟生活は強く關聯してゐる。以上合衆國西部の三區の境界が主として地形によるのは、この地域

書 評



アメリカ合衆國の經濟地理區

1. 太平洋沿岸區
2. 大盆地高原區
3. ロッキーマウンテン區
4. 大平原農牧區
5. 上部大湖區
6. 玉蜀黍地帯
7. 棉花地帯
8. アパラチヤ・オザーク區
9. メキシコ灣沿岸區
10. 東部工業地帯

では山脈が商業、交通に影響するのみならず、氣候にも極めて密接に關係づけられてゐるからである。ところが、ロッキーマウンテンの東へ行くと何等著しき氣候的障害はなく、土地利用の方法は寧ろ土壤の性質、降水、成育期間、礦物埋藏の有無遠近等に關すること大である。ロッキーマウンテンの東は直に(4)大平原となる。こゝの主なる制約因子は雨の寡いことであるが、その東端は何等著しき自然的境界をもつてではなく、たゞ大平原の農牧的經濟が東方に進むにつれ合衆國東半の玉蜀黍、棉花、酪農等のやゝ濕潤なる經濟に移り變るところまで續く。この大平原區は寡雨地であるが、その東の境界は毎年の雨量の變化と東部境界附近に耕作し得る各種農作物の相對的價格の變化によつて移動するが、この線が大體、合衆國を西半の乾燥氣候型農業と東半の濕潤氣候型農業とに二分する境界線である。

これよりあとの地域の境界線は東西の方向に走る。即ちそれは成育期間の長短に左右せられるのである。最も北には(5)上部大湖區があり、森林を以て被はれ、玉蜀黍には冷涼にすぎることが酪農に適する。その南は(6)玉蜀黍地帯で氣候的に玉蜀黍に最適であり、次は(7)アパラチャ・オザーク區で、丘陵帶をなし氣候よりは地形と土壤が主要な地理的因子をなしてゐる。その南には(8)棉花地帯が廣く擴がり、その四周の境界

は氣候によつて作られる。即ち北は成育期間二百日の線、西は年雨量五百耗の線、棉花は雨量が多すぎるとは成育しないので、南と東は秋の雨二百五十耗の線と大體一致してゐる。そしてその等雨量線の外側に(9)メキシコ灣沿岸區が出来、フロリダ半島から大西洋岸の狭い地帯を含んでゐる。最後に合衆國の東北部に(10)工業地帯がある。この地域では農業は第二次的な意味しか持つてゐず、經濟生活の中心は都市にあり、高度の運輸と工業原料、原力への接近とが主要因をなしてゐる。

本書は以上の如き十の經濟地域に合衆國を分け、要すれば各各を更に亞區に分けて、その經濟發達、經濟活動を説くのであるが、多數の地圖を挿入して常に面積的な、地域的な觀念を浮き上らせてゐることは、アメリカ經濟の研究者にとつては有用なことであらうと思ふ。この短文は本書の主要内容たる各經濟地域の説明については何等觸れる餘裕はないが、その敘述分析に於ては必ずしも特に新なる解釋を加へたといふ部分は多くないやうである。然し本書の價値はアメリカ合衆國或はその經濟生活を常に一つの個體としてのみ考へてゐる、言ひ換へれば地域的な觀念の少い日本人々には役立つであらう。そしてそれがアメリカの場合のみでなく、一般に地域科學たる地理學やその一分科たる經濟地理學の任務であり、特徴であるのである。(昭十七・六・二八)